

はじめに

本書は、2011年に著者と木村氏と共著で出版した拙書（注）の内容を変更したものです。主な変更は、著者の記述した部分のみとしたことと、加筆および修正、画像の追加、課題例、課題制作物例です。これらにより、本書の目的とするところの木下メソッド・平面コンポジションの教育方法や内容などを更に理解しやすくなることを目的としています。

現在のデザイン教育には、実は重要な基礎的な教育プロセスが未完成であると、筆者は主張していますが、読者の皆さんはどのように反応されるでしょうか。また、デザイン教育と称される教育が実は別のモノ、例えば、アート、設計、エンジニアリングなど、とするとどうでしょうか。これらの誤解は教育段階でも大問題ですが、企業側では、そのようなことでは済まされません。デザイナーとして雇用した芸術大学や美術大学などから輩出され、採用した学生らが実は求めている能力を備えていないということが、企業に与えるダメージは恐怖すらを伴うでしょう。実際に今日に至っても、デザインは応用美術の域を脱しできてないか、設計や計画などと混同されている程度と感じられます。何故、このような状況なのでしょう。それは、デザインの概念が日本に到達するまでの経路に問題があり、本来の意味を歪曲したか、失った状態で受け入れてしまったからです。

カタカナの外来語であるデザインは、日本では、間違いなく産業革命が起こった際に必要とされ生まれた、インダストリアルデザインやモダンデザインのことで、そして、マスプロダクションを迎えた企業の要請で誕生した新しい産業技術なのです。昨今、専門的ではない書店の書棚でデザイン関連の書籍を目にします。これは、一般の人々のデザインへの興味や関心が増してきていることを反映しているのでしょう。しかし、その多くがデザイン専門分野（ビジュアルデザインやプロダクトデザインなど）を対象にしている場合が多く、「デザインの基礎」を対象にしたものはあまり見られないようです。この理由

としていろいろ考えられますが、読者が必要性を感じていないとか、内容が身近に感じられないことが挙げられるでしょう。そういう意味で「デザインの基礎」は、未だ理解しづらい曖昧な状況にあるようです。本書の中では、その曖昧さの原因についても触れながらも、私がこれまでの研究や教育実践を通じて考案した教育方法である「木下メソッド・コンポジションレッスン」について解説します。併せて、技能を磨いていくことや習熟することの有効性、この教育の存在意義について述べたいと思います。

筆者が実践している基礎段階での教育は造形要素から主に「形態と色彩」、応用段階での「デザイン技法」や「制作上のマナー」をそれぞれ取り入れています。そして、他の造形要素である、「素材と質感」は並行して教育する立体コンポジションや静物デッサンで教育しています。ここでの「デザイン技法」というのは、視覚デザインの原理等から選択したものであり、教育内容に組み込むことに適していると判断したものを「コンポジションルール」として、基本的な評価項目とします。また、コンポジションする要素（エレメント）はCE、このCEをコンポジションしたコンポジションオブジェクトをCOと記述します。コンポジションは造形要素である形態、色彩、素材、質感などをコンポジションすることですが、それぞれの造形要素の選択範囲は無限にあります。その中から実習課題で求められているルールや評価に合うように選択します。そして、コンポジションの仕方も無限です。よって、課題の解答も無限にあり、論理的思考や創造性を高めることに効果を発揮するでしょう。このような技能を養成するための訓練が「コンポジションレッスン」です。造形エレメントを選択する根拠は基本的に視覚心理（造形心理）ですから、形態や色彩に関する心理効果についての基本的な専門知識を習得しておくことが求められます。

第1章では、コンポジションルールの設定に関する要因とその内容について、第2章では、筆者が実践している授業の内容や評価方法と使用する画材と用具について、第3章では、筆者が考案した課題の例と、学習者の課題制作例です。課題文と課題制作例は意図的に一致させていません。読者の皆さんに大体のイメージを掴んでいただければと考えています。第4章は、筆者がコンポ

ジションレッスンをデザインの基礎教育科目として成立させたアイデアや調査を行った際に考えたことを述べています。

本書が対象とするのは、「コンポジションレッスン」の一部分である「平面コンポジション」ですが、これ以外にも「立体」「空間」「映像（動画像）」というバリエーションがあります。2次元を対象とした平面コンポジションは他のコンポジションレッスンの導入部分ですので、まず、平面コンポジションでコンポジションルールや評価項目などを把握・理解することで、立体や空間等のコンポジション課題に取り組みやすくなることに繋がることでしょう。

目 次

はじめに	1
第 1 章 コンポジションルールと評価項目	7
1.1 ルールや評価項目の設定の要因	7
1.2 コンポジションルールの設定	8
1.3 評価項目の設定	9
1.4 課題制作上のルールと評価項目	17
第 2 章 授業方法	19
2.1 授業の流れ	19
2.2 評価方法	29
2.3 作業過程のルール	30
2.4 画材と用具	31
第 3 章 実習課題	33
3.1 色彩実習課題例	33
3.2 平面コンポジション実習課題例	35
3.3 その他の課題例と課題制作物の例	37
第 4 章 コンポジションレッスンとは	53
おわりに	59